

なみた壺

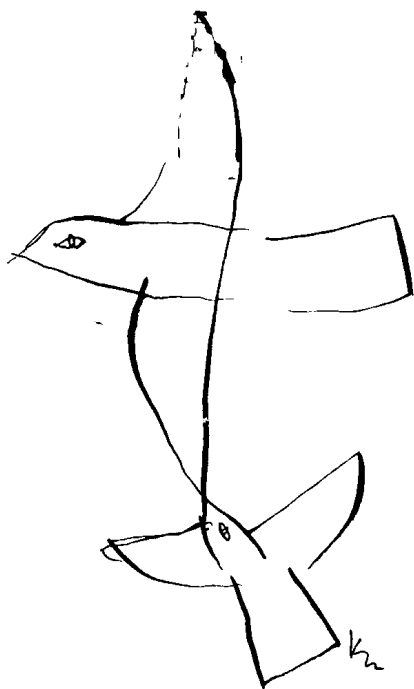
村松友視



新潮社

なみた壺

村松友視



なみだ
壺^{つぼ}

一九八八年二月一〇日 印刷
一九八八年二月一五日 発行

著者 村松友視^{むらまつともみ}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替 東京四一八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 一二五〇円



© Tomomi Muramatsu
1988, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-10-352302-6 C 0093

なみだ壺

I

今年は空梅雨^{からつゆ}かとり取り沙汰されたあげく、梅雨は予定通りやってきた。六日連続して降りつづく雨が、総合クリエーションと銘打つ「ファーム・チーム」の事務所の中を、何となく儼々^{げんげん}くさく感じさせている。そこにたむろするメンバーも、緩慢な動作で仕事をこなし、事務所をひらいて十日目という新鮮さは、どこにもただよつていないのだ。ドアを開けたとたんにそんな光景を目にした、TBCテレビのプロデューサー近藤は、眉根を寄せ大きく息を吐くと、

「覇気がないですね、覇気が」

大声で言つて露木仙一郎の前にあるソファへ腰を沈めた。

「泣きが入っちゃうよな、まったく。満を持して事務所をオープンしたらとたんに梅雨入りだろ、気分がはじめじめして弾みがつかないんだよね」

「まあ、分かるけどさ……」

近藤は、含みのある調子で言つて、おもむろにタバコをくわえた。こんなときの近藤は、きつとこの停滞を突き破るプランをもっている……露木は、近藤の妙に落ちついた仕種を目で追いながら、そんなことを思っていた。

同じ大学を同時に卒業したが、社会へ出てからの露木と近藤は、正反対といつていい生き方をしている。TBCテレビの就職試験を受け、そのまま士官候補生としてのエリート・コースを進んだ近藤は、同期仲間でも頭ひとつ拔きん出た出世ぶり、敏腕の看板プロデューサーとして華々しい話題をふりまいている。とくに、ドラマとドキュメンタリーを合体させた特別番組は、軽薄

短小を謳^{うた}われるテレビ界で異彩を放ち、次々と話題作をつくり上げていく。

大学を出て出版社へ就職した露木は、近藤のように順調な時間を過ごすことはなかった。つとめた出版社が一年半後に倒産し、別の出版社へ再就職をしたのだが、途中入社という経歴がカセのようにつきまとった。露木は、その出版社に十五年もつとめたが、ついに自分の思い通りの仕事をしたという実感が何もないまま、そこを辞めて独立した。独立した……といっても、野望をもつてというよりも、いつまで会社づとめをしていても何の展望も期待できないから、ちよつと風を変えてみようという程度の気持ちだった。

出版社にいたときに知り合った他社の編集者やフリー・ライター、それに編集企画の事務所にいた女性などをスカウトし、基本的には他のアルバイト仕事を認めるかたちで、とにかくにもファーム・チームはスタートした。

ファーム・チームは、プロ野球の二軍のイメージだが、虚飾にまみれた一軍よりも、プロ野球の凄味がただよっているのはその世界だという、露木のかねがねの思いをかさねた命名だった。

「ファームねえ……まあ、せいぜい頑張つてよ」

近藤は、計画を打ち明けた露木に、はげましといったわりのまじり合った顔を向けたものだった。

「ところで、何か企みを胸中につて顔だけど……」

露木は、自分が吐き出したタバコの煙^{けり}のゆくえをじつと見すえている近藤を、さぐるような目で一瞥した。ちゃんとした大人……露木の頭にそんなセリフが浮かんだ。同じ年齢だが、どこか子供じみた表情の抜けない露木にくらべて、近藤は堂々たる大人の風情を着実に身につけている。それが、露木の目に味気ない姿として映ることもあったが、仕事に意欲を燃やしているときは、テレビ・プロデューサーらしいセンスが、軀^{からだ}ぜんたいに漲^{もよほ}っていた。

「露木、おまえ、瀬戸内海に興味ないか……」

近藤は、おもむろに切り出した。

「瀬戸内海……」

「あっちの方、行ったことあるか」

「四国か中国ねえ、まあ、一応は行ったことあるけどね」

「あのへんにただよってる空気、何だか変だと思わないか」

「という……」

「水軍の魂というか何というか、これまでの日本の歴史の中で、すっぱりと抜け落ちたような世界が、あのあたりにうごめいているような気がしないかい」

「何だい、唐突にむずかしいセリフ吐かれても、急にはついていけないぜ」

「あ、そうか」

近藤は、頭の中でしゃべる手順を修正しているかのごとく宙をにらみ、あらためて露木へ向き直った。

「こいつは、おまえんとこの初仕事にピッタリだと思うんだけどさ、テレビと雑誌のタイアップ企画なんだ」

「それが、瀬戸内海とからむのか」

「そういうこと。いま、旅とか温泉だとか地方の名物だとか、そういうのをクローズ・アップする番組や記事が多いだろ」

「ああ、そういえば……」

「あれは、何となくレポーターの紹介で薄っぺらな感じがしたり、食通ぶった文化人の手前勝手なゴタクってイメージがあったりして、いまひとつ迫力が無いだろ」

「そうかねえ……」

「おまえ、そう思わないか」

「いや、番組や記事の性格ってやつがあるからね、あれをあんまり重くやったらって始まらないよな気がするけど」

「それが、蔑視なんだよな」

「蔑視って……」

「テレビや雑誌への蔑視……どうせマスコミでは、大したことをやれないと初めから決めてしまふ蔑視的思想さ」

近藤は、灰皿へ持つていったタバコを、神経質に押しつけた。そして、鋭い目で何やら思索するふうを見せてから、

「ちよつと、出られるか……」

露木の目をのぞき込み、押し殺したような声を出した。

事務所を出ると、あらためて雨が降っていることに気づいたようになり、一瞬、露木は首を傾げた。傘をさしかけた近藤が、空を見上げて舌打ちをした。

「最近、雨の音がしなくなったなあ……」

近藤は、傘に打ち当たる雨音を聞きながら、しんみりとした声で言った。

「傘に当たる雨の音ね……むかしは、唐傘だったからよけいひびいたな」

「それに、トタン屋根に打ち当たる音」

「そうか、軒先はトタンになつていたからなあ」

「雨が降り出して、トタンヘパラパラと当たる音、ありゃあちよいとしたもんだぜ」

「雨宿りも、あんまり見なくなつたしな」

「何しろ、三百円のビニール傘がこう発達しちゃあ、雨宿りする必要ないもんなあ」

「折り畳み式ってやつもいけない」

「雨が降らないのにカバンの中へ傘を入れてるから、急に降られて雨宿りってことがない」

「とにかく、雨の音はなつかしいよ」

「俺たち、ときどきモロ中年になるな」

「だって、中年だもの」

「ま、おまえはな」

「同じようなもんさ……」

二人は、しばらく歩いてアーケード街に入り、喫茶店「アヴェニュー」のドアを引いた。中途半端な時間のためか、客は誰もいなかった。奥の席で雑誌を読んでいたルミが、ドアが開いて入って来た二人を見て、弾かれたように立ち上がると、盆に水の入ったグラスを乗せてやって来た。マスターは、あいかわらず何種類もの競馬新聞を読み耽っていた。二人を見てペコリと頭を下げたが、すぐにもとの姿勢にもどった。

「ルミちゃん、しばらく見ないうちに大きくなったねえ」

コーヒーを注文してから、近藤がつくづくルミの軀をながめ回して言った。

「あら、どこが？」

ルミは、挑発的な表情を見せてにつこり笑い、マスターに「コーヒーふたつ」と告げた。マスターは、大儀そうに腰を上げ、コーヒーの用意をはじめた。

「おまえ、セリフも中年になったな」

露木は、からかうように近藤の肩を指で突いた。そのとき露木は直感的に、近藤は中年と言われるのをきらいじゃないらしいと思った。その理由は分からないが、中年であることに自負心を抱いているような反応を、指で近藤の肩を突いたときに、露木は感じ取ったのだった。

「それで、さっきの話だけださ……」

近藤は、自分を凝視する露木の目がわずらわしくなったのか、あらためてくわえたタバコに火をつけた。

「俺も、そろそろテレビで一仕事したくなってき……」

露木は、コーヒーを啜りながらそう言った近藤の言葉が呑み込めなかった。近藤は、すでにTBCテレビの有名プロデューサーであり、次々と話題の番組をつくっているではないか。その近藤が、「そろそろ一仕事……」と言った根拠が何なのか、露木には計りかねた。

「その一仕事っていうのが、瀬戸内海と関係するのか」

「まあ、そういうことだ」

「もう少し、くわしく話してくれよ」

「いや、俺にもまだ分かっていないんだ」

「……」

「瀬戸内海あたりに、水軍の魂がうごめいているといったけはいを感じたのは、いわば俺の勘でね」

「勘……」

「だから、その根拠はまだ分からない」

「じゃあ、企画にも何もならないだろう」

「そこだよ、雑誌記者や作家が何かを取材するって言うとき、まだ何もつかめていないのにとりあえず現地へ出かけて行くのだろ」

「ああ……」

「それで、手さぐりで探っているうちに何かをつかんで、そこを切り口にして本質へ迫ろうと追究していくよな」

「それがまあ、ふつうだね」

「ところが、テレビのカメラやレポーターの取材は、お膳立てがととのった上でうごくわけだ」

「そりゃあ、機材もあるしな……」

「それに、スポンサーやおえら方の承認を得るために、だいたいの内容を報告しなくちゃならない」

「だから、仕方ないんじゃないの」

「それが、テレビ蔑視なんだよ」

「また、蔑視か……」

「そう決めちゃわないで、何か突破口はあるはずだ」

「それじゃ、漠然とした興味のままスタートするわけか」

「ま、ある意味ではね」

「しかし、瀬戸内海に水軍の魂がうごめいているという勘だけっていうのは、あまりにも漠然としていすぎるんじゃないの」

「だから、そこでおまえに相談だ」

近藤は、コーヒー・カップを宙で止め、まっすぐに露木を見た。その目には、異様な熱があった。

（こいつ、何を考えたんだ……）

露木は、まだ強い手応をもつて伝わってこない近藤の意図に、苛立ちをおぼえはじめた。脚を組み替えた露木は、大きく息を吐いた。

「俺は、ドラマとドキュメンタリーのドッキングを考えた……」

近藤は、ゆっくりとした調子で語りはじめた。

「そしておまえは、テレビと雑誌の両方にまたがったプロダクションをスタートさせた。つまり、テレビと雑誌のドッキングと言っているわけだ」

「まあね。でも、俺はまだテレビと雑誌をドッキングさせる方法論をあみ出したわけじゃないからな。ただ、テレビと雑誌双方の企画を請け負うだけだから……」

「それを、発展させるんだよ」

近藤は、ちらりとマスターを一瞥してから、あたりをはばかり顔で身を乗り出した。近藤は、ときどきこういう芝居めいた表情をつくる。そのとき、露木は学生時代の近藤を思い浮かべるのだった。

（こいつの学生時代の名残は、この貌^{かお}くらいのもんだな……）

大人のイメージにおおわれた中に、ぼつかりと塗り残された地肌のように見えるそんな表情が、なぜか露木を安心させた。

「発展させるって、どういうことだい……」

「俺はね、おまえと組んで新しい仕事がやと出来ると思ってるんだ。俺だけじゃ駄目、おまえだけじゃ駄目……でも、二人が組めば何かが成立する。やとこんな時がきたかと思うとうれしくてさ」

「まだ、よく分からないな……」

「記者とレポーター、プロダクションとプロデューサー……これが、ぜんぶ参加してつくり上げる世界とでもいうかな」

「まずまず、分からなくなるよ」

「つまり、テレビの世界を導入した雑誌記事と、雑誌の世界を導入したテレビ番組を、平行してやっていくわけさ」

「でも、目的はあくまで漠然としているんだろ」

「だから、まずおまえがその漠然たる目的を探りに行くところからはじめたいんだ」

「俺が……」

「そう、おまえがだ」

「あのね、こう見えても俺はプロダクションの社長だぜ、まあ弱小プロだけどさ。つまり、影の

側の人間なんだよ」

「いや、おまえは本来、表の側の人間だ。俺はね、プロデューサーの勘でやつとおまえのキャラクターが分かってきたんだ」

「また、勘か」

「時間がかったよ。おまえは会社では何となく浮かばれなかったけど、これは能力の問題じゃなくて、おまえは組織に入ると力を発揮できないタイプなんだ。だから、表の側の人間なんだよ。おまえが前面に出るというのが、今回のプランの骨子だ」

近藤は、鋭い目で宙の一点をにらんだ。自分が言っているのは酔狂や冗談じゃない、真面目すぎるくらい真面目なことだ……そういうムードを伝えようとするときの、近藤独特の表情だった。俺が前面に出る？　ちょいとばかり意味が分かりにくいね」

「何かをつかめるか否か……そのセンスをおまえにまかせる。つまり、一介の取材記者のように編集長の顔色をうかがう必要も、報告の義務もない取材さ。そんな役をまかせられるのは、今のところおまえしかない」

「えらく買いかぶられたもんだな」

「まあ、この買いかぶりに企画のすべてがかかっているようなもんだ。最初は、何かがつかめるかもしれないという予感だけしかない。その予感に導かれて、おまえが何を引っかけてくるか……助走はそこからはじまるってわけだ」

「まるで、小説家みたいだな」

「そこだよ」

「……」

「俺は、ドキュメンタリーとフィクションの合体をテレビでやったけど、活字の世界でもフィクションとノンフィクションの合体はあり得るだろ」

「それは、ドキュメンタリー・ノベルなんているスタイルがあるからな」

「そういう両ジャンルの合体同士の合体というか、テレビと雑誌の両方を武器にして表現する企画を考えたのさ」

「そんな突飛なプランに、局のおえら方やスポンサーが乗るもんかねえ」

「それが出来るからこそ、生き馬の目を抜くテレビ界で、この俺様が成立してるってわけさ」

「そりゃまあ、そういうことなんだろうけどさ」

「それに、最初はおまえが主題をさぐる文章からスタートするわけだから、テレビ局のおえら方やスポンサーには、とりあえず関係はない」

「しかし、俺のそんな文章を載せる雑誌があるかどうか……」

「それを、おまえに探せとは言わないさ」

「それじゃ、もうお膳立てはすんでののか」

「当たり前だ。そういうことはちゃんとやらなきゃ、俺たちの業界は通らない」

「さすが……というんだろうな、やはり」

「おまえ、今晚あいてるか」

近藤は、胸を反らし少し声を張って言った。

アヴェニューでの近藤は、とりあえずジャブを放つにとどめるといふふうに、あまり具体的な話をしなかった。

だが、露木と組んだ仕事がようやく成り立ちそうだという気の弾みは、たしかに近藤から感じられた。これまでにそんなケースがあったら、それはたぶん、近藤が自分の面倒をみるかたちになっってしまったていただろう。二人が五分と五分でつるむ……そういうことを思えば、たしかに機が熟したという感じはある。

いったん近藤と別れた露木は、頭の中を巡るいくつかの想念を、ぼんやりとながめるような気分で、事務所へ帰って来た。

「露木さん、お客さまがさつきから待つてらっしゃるんですが」

チームのメンバーのひとりである早穂子が、衝立ついでのかけを指すような仕種で言った。

「お客……」

「あら、お約束だつて」

露木は、腕時計を見て舌打ちをした。

「忘れてたんですか」

「すっかりね」

「近藤さんと、よっぽど魅力的な悪だくみをしてたんですね」

「悪だくみか……いいフリーズだな」

露木は、そう言いながらいったんデスクへ向かい、抽出しから名刺を一枚つまみ出して衝立のかけの応接セットへ向かった。

「すっかりお待たせしちやつて……」

衝立の中へ入った。ソファに腰をしずめた露木は、そこに坐っている女性を見て目を瞠なった。

「いやあ、これはすみません。この事務所でアルバイトをしたいという若いお嬢さんだと思つたもんで」

「若いお嬢さんでなくて、こちらこそ申し訳ありません」

「いや、そういう意味じゃ……」

頭を手をやりながら、露木は信じられないという顔で、まじまじと松浪百合子を見つめた。

松浪百合子は、露木とは別世界のファッション関係の雑誌の花形編集者だ。三十を超えたかどうかという年齢だが、彼女のつくるページは業界のスポットを浴びていた。写真、レイアウト、

そして彼女が自ら書く文章の組み合わせが、ひらいただけで鮮烈なイメージをとどけてくる。視覚的な部分が強くなったファッションの世界で、彼女は自在にその才能を発揮していた。

だが、松浪百合子は編集長ではない。これはおそらく、年齢のせいもあるのだろうが、彼女を役職につけるよりも、フリーの編集者のような立場を与えておくのが得策……会社の側のそんな考えからくる処遇という気がした。

「どうしてそんなにおどろいてらっしゃるんですか」

百合子は、露木の様子を見て面白そうに笑った。

「いや、しかし……」

「わたし、露木さんのお手紙を読んで、ここへ来たんですよ」

「それじゃ、あの手紙を読んでくれてたんですね……」

露木は、仕事をスタートさせるに当たって、松浪百合子をスカウトしようとした。新しい雑誌づくりには、どうしても自分にはないセンスが必要だ。

露木が欲しかったのは、ヤングのセンスというのではなかった。ヤングのセンスなら、そのへの雑誌をながめていて、二匹目のドジョウを狙えばいい……そう思っていた。そんなセンスではなく、しっかりとしたページづくりのプロでありながら、自分が入り込めない感性をもったキャラクターが一枚加われば、ファーム・チームはかなりのプロダクションになると踏んだのだ。そして、ターゲットを松浪百合子と定めた。

だが、松浪百合子ほどの花形編集者を、会社が簡単に手放すはずはない。いや、会社よりもまず彼女自身に、海のものとも山のものとも分らないファーム・チームに身を投じる必要など、まったくないのだ。

そこで露木は、とりあえずファーム・チームの主旨を書き、無理を承知でお願いすることを強調した手紙を出した。だが、ファーム・チームがスタートしても、松浪百合子からは返事がなか